

朝日旧友会報

朝日旧友会

東京都中央区築地五―三二

朝日新聞東京本社内

〒104-8011

TEL 三三五五〇一三二

内線 六一八六六

「役員に定年」案

会長・副会長80歳
五月の定時
総会で審議

朝日旧友会は九月、十二月と相次いで幹事会を開き、秋山耿太郎会長が旧友会活性化に向けた基本方針を提案し、それをもとに議論した。その結果、会長副会長は八十歳を定年とする新制度を導入することを決めた。また、旧友の意見を幅広く旧友会運営に取り入れ、あわせて幹事会の議論を活発化させるため、副会長を現行二人から三人以内に増員することを目指すとした。加えて、東京大阪、西部、名古屋、北海道の四本支社の旧友会の連携強化をはかるため、会の名称を統一することを申し合わせた。東京はこれまで朝日旧友会としてきたが、他本支社に倣って朝日新聞東京旧友会と名称が変わる。これら諸点の改正のため、規約改正を二〇二〇年五月の定時総会に提案し、承認されれば実施の運びとなる。

幹事会決定

朝日新聞東京旧友会
名称変更

東京の旧友会員の年齢は、年々高齢化し平均七十歳代後半になっている。本社の定年年齢が六十歳から六十五歳に引き上げられたことに伴い、今後さら



春よ来い 山村行志さん撮影

に高齢化が進むとみられる。秋山会長は、会員の若返りをはかる必要があると考え、まずは会長ら役員から定年を定めて、清新の風を絶えず吹き込むようにしようと、提案した。事務局長七十五歳定年も提案したが、こちらは継続協議となった。副会長については現在、販売局、工務局の各代表、合計二人が就任しているが、本社の経営の実情に合わせ、幅広い分野から代表を選出すべきとの考えから増員が提案された。基本的には適材適所だが、まずは本社が力を入れているデジタル分野からの起用が念頭にあるよう

二〇二〇年 定時総会日定

「日時」 5月14日(木) 午後3時

「場所」 朝日新聞記念会館(有楽町マリオン11階)

だ。そして、各分野からの声を旧友会運営に反映させ、幹事会などの議論を活発化させる狙いがある。

これに関連し、役員の選考方法をあり方についても議論した。現行は特別に選考委員会を設置し、候補者を絞り込み総会に提

講演会開きます

朝日旧友会は、会員の関心の高い問題について左記の要領で講演会を開きます。一回目は、朝日新聞企業年金基金の阿部圭介常務理事にお願ひして、朝日新聞の企業年金が今後どうなるのか、解説していただきます。ふるってご参加ください。

なお、会場設営の都合上、旧友会あてご出欠のご返事をいただければ幸いです。

日時 三月二十三日(月) 午後三時から
会場 読者ホール(本館二階コンコース右側)
テーマ 朝日新聞の企業年金について
講師 阿部圭介氏(朝日新聞企業年金基金常務理事)

朝日の年金どうなる

3月23日 読者ホール

常任幹事と
相談役廃止

朝日旧友会の幹事会はまた、幹事(約二十人)のうち八人について、常任幹事に任命してきていたが、実際の活動が不明確なうえ、実情に合わないとして、廃止を申し合わせた。

さらに、相談役についても、規約に「本会に相談役を若干名おこなうことができる。相談役は会員の中から総会で推す」と定められているが、やはり役割が不明確なうえ、これまで、任命された者が一人もおらず、必要ないとの意見が大勢を占め、廃止することにした。

案する方式をとっているが、実態は、各役員の出身母体のなかで引き継ぐ形で継承されてきた。こうした実情も踏まえ、今後はわざわざ特別に組織をつくらなくても、常設の幹事会場で話し合い、候補者を推薦するやり方でもいいのではないかという意見が大勢を占めた。

また、旧友会は四本支社ごとにそれぞれ設けられている。名称については大阪、西部、名古屋、北海道はいずれも、朝日新聞の後に各本支社名を入れて会の名称としている。例えば、朝日新聞大阪旧友会という名称だ。しかし、東京だけはこれまで朝日旧友会としてきた。今度の変更は、これを統一しようというものだ。秋山会長は、本社が厳しい経営を続けている中、本社を応援する組織として、本支社の旧友会の連携強化が何より大切として、思い切って他社に歩み寄る姿勢を示したわけだ。

メールアドレス
お知らせ下さい

多くの旧友会員のみなさまから「メールでの連絡が便利だ」との声をいただいています。連絡用のメールアドレスをお教えください。アドレスとお名前、旧所属(代表的なもの)、また、確認用に住所を明記して、info@tokyo-kyuuyui.jpまでお知らせください。

デジタル環境を整備

旧友会にパソコンと光回線

朝日新聞東京本社八階の朝日旧友会事務局のパソコンをこのほど更新し、同時にインターネット回線を光接続に更新しました。これまでの個人パソコンを使ったADSL通信に比べ格段に事務局機能が強化されました。

会員間で柔軟に情報を共有

またこれにあわせ、これまで外部業者に委託してきたウェブサイトの事務局で独自に更新できるように、整備し直しました。

より柔軟に、多様に、会員間の情報共有が可能になりました。みなさまの近況や部署ごとの集まりの報告なども掲載していきたいと思っています。情報を是非お寄せください。

幹事会で
推進決定

会幹事の大前純一さんが進めてくれたものです。旧来、事務局の個人の好意で、私有のパソコンを持ち込んで作業をしていていたのを改め、旧友会共用のパソコンを購入（デスクトップ型一台、ノート型二台）し、永続的にデジタル環境の整備を図るものです。

なお、プリンターについても個人所有のものを使わせてもら

っています。こちらについては、ご好意で引き続き使わせていただきます。

復活できないか、模索すべしとの意見があり、引き続き検討をしていくことになった。

旧友会活性化へ多角的な検討

幹事会ではまた、決定事項のほか、様々な分野について議論し、検討を加えた。検討項目と論点は次の通りだ。

▽旧友会員の葬儀への対応
現在、通夜、葬儀に際し、旧友会名で生花を供えている。費用は約一万六千円。近年、家族葬が増え、供花の実施が一部に限られるため、供花の見直しをすべきとの意見があったが、一方で、継続すべしとの意見もあり、継続協議になった。

▽旧友会報・会員名簿作成費の見直し
いざいざ、東和印刷に発注しているが、費用の合理化を図る観点から、他の業者

について見直しを取り、検討すべしとの意見が出た。朝日の関連会社の朝日プリンテックが候補にあり、印刷ばかりでなく発送の費用の比較点検を行った。その結果、当面、東和印刷の優位が動かず、引き続き東和印刷に発注することにした。

▽旧友会員の親睦を深める催しの開催
旅行会や趣味のグループの活動などを実施できないか、考えるべきとの意見があった。いずれも実施には賛成だが、世話役の確保が課題として、引き続き研究を続けることになった。

▽他本支社旧友会との連携強化
他本支社との連絡を密にしつつ、協力関係を強めていく観点から、引き続き検討を続けていくことになった。

朝日旧友会規約改正案

(名称及び事務所)

- 第1条 現行 本会は「朝日旧友会」と称する。
改正 本会は「朝日新聞東京旧友会」と称する。

(構成)

- 第7条 現行 本会に下記の役員をおく。
1、会長 1名
1、副会長 2名
1、幹事 若干名
役員は総会で選出する。
改正 本会に下記の役員をおく。
1、会長 1名
1、副会長 3名以内
1、幹事 若干名
役員は総会で選出する。

- 第11条 現行 本会に相談役を若干名おくことができる。相談役は会員の中から総会で推す。
改正 削除
第12条から20条まで、それぞれ1条ずつ繰り上げる。

- 第12条 現行 役員の任期は2ヵ年とし、補欠によるものは前任者の残任期間とする。ただしいずれも重任を妨げない。
改正 役員の任期は2ヵ年とし、補欠によるものは前任者の残任期間とする。いずれも重任を妨げない。
ただし、会長、副会長は80歳を過ぎて再任はしない。

(事業)

- 第13条 現行 本会の目的を達成するために下記の事業を行う。
1、会員の親睦のための事務所の運営および諸会合
2、会報の発行
3、その他
改正 本会の目的を達成するために下記の事業を行う。
1、会員の親睦のための事務所の運営および諸会合
2、会報の発行、ホームページの作成
3、講演会の開催等

交

差

点

今年こそお会いしましょう。ぜひ。

今年こそお会いしましょう。ぜひ。

天声人語筆者だった辰濃和男さんから届いた二〇一五年の年賀ハガキだ。

たった一行 響いた一言

数十行の手紙より、心に届いた一行のハガキがある。

かけがえのないハガキ

天人・辰濃さんの思い出新たに

このころの辰濃さんは病氣と闘うと言う日々を送っていた。それまで何度かお会いする機会があったが、辰濃さんの体調が優れず、お会いできなかった。

記者の手元に毎月届けられた編集局報「えんびつ」に掲載された「いい文章」の拡大版である。朝日新聞の諸先輩に辰濃さんが「いい文章」とは何かを聞き、

を読み比べ、合評会を開いていた。真剣そのものだった。部長は内藤義正さんと、次の部長は村野坦さんだった。

「えんびつ」編集者の私に、

「えんびつ」は朝日で働く記者諸君にとって、活発に論じ合う場であつたと思う。いつの間にか「えんびつ」は消えてなくなった。経営理念が優先したのだろう。

ニュースをぎゅつと掴め デスクの言葉、傘寿の述懐

村野さん



朝日への入社は一九六三年、今年のように東京五輪の前年でした。編集部門の同期五十人中、空前絶後と思えるのは私を含め大学の同じゼミ出身が五人を占めていたことです。政治学系のゼミでしたから大方、政治部志望のようでしたが、私は当時のNHKのテレビドラマ「事件記者」を見て、密かに「あれがいな」と思っていました。みんな

政治部の先輩に有馬純達という方がいました。真顔で冗談をいう癖があり、例えば本社があった有楽町界隈の夕食の席でラ

グビーの話になったとき、「試合中に選手が固まって股ぐらに首を突っ込んで、あれ何を相談しているのですかね。皆、箸が止まりました。そういうことがよくあるので悪い先輩は「純」を「鈍」と読み変えて「どんたつ」と呼んだりしていました。その有馬さんがデスクのとき、私は厚生省担当で医療保険について原稿を出したことがありま

す。一読した有馬さんは「だらだら長すぎる。もっと簡潔に。原稿はグラスブだよ」と言うのです。幸い私は「グラスブ」が英語の「GRASP」で「ぎゅつと掴む」といった意味と分かりました。政治部で英語で指導されるとは思いませんでしたが、有馬さんが米国生まれで後に欧州総局長を務めたことからすれば、思わず英語が出たことも分かります。いずれにしても、この一言は老舗の口伝を受けたように、原稿の取りまじめに開眼した思いがしたものでした。今の報道ぶりは、だいぶ違います。表現手段が鉛活字から電

子活字に変わり文字や行間の制約が緩くなりました。デジタル化で字数の縛りからも解放されたようです。多メディア化の中で新聞が解説とか背景説明に力を入れるという役割変化も起きています。それにしても、今昔の感に耐えません。

父が国語・漢文の教師で歌詠みでもあつたせいか近ごろ私も時どき、その真似をします。今のことは、こんな風にまとまりました。

簡潔の教えかみしめ記事書きし今はサイトに長きリポート（二〇一九年十月、政治部OB会で傘寿の祝いを受けて）

（大塚国昭）

取り上げるといふのはどうでしょう。記事を書けなすばかりでは進歩がありませんから」

その後数回、辰濃さんがいる顧問室を訪れ、具体的なことを話しあつた記憶がある。そして、スタートした。

スタートに際し、辰濃さんは「『新聞文章と私』を発行するにあつて」を執筆し、次のように書いています。

これからの新聞のありようを考えると、私は、自己嫌悪という己の思惑とは別に、社内の人になることが望ましい、と思つています。いや、自由闊達（かつた）な文章論がなくては、新聞はもはや生きのびられないと覚悟しなければなりません。

「えんびつ」は朝日で働く記者諸君にとって、活発に論じ合う場であつたと思う。いつの間にか「えんびつ」は消えてなくなった。経営理念が優先したのだろう。

その頃のあたりから、朝日新聞が元気を失い始めたような気がする。この思いは私だけではなく、OB諸君からもそんな声が聞こえてくる。

杵を設けずに、世代を越えて話し合うこと、議論することの大切さを感じたOB五人が、月に一度の勉強会を開いている。

（大塚国昭）

“農業戦線” 異常あり

米どころ魚沼から報告 大前さん

弱体化する中、気候変動

私はいま、田舎に住んでいる。田舎から見える光景は、面白い。

目の前に広がる魚沼盆地は、コシヒカリの聖地。きれいな田んぼが広がっている。

しかし、そこで出来る米は、かなり変わってきている。今年

は、白濁する米粒が多く、一等米の比率が二〇%以下と史上最低になりそうだと伝えられている。八月から九月にかけて四〇度近い猛暑が襲った影響らしい。

十数年で 急激な変化

魚沼地域の米がおかしくなってきたのは、この十数年ほどだ。猛暑だけでなく、二〇一一年の新潟・福島豪雨などでの大雨や土砂災害、穂が出てから実るまでの「登熟期」における低温、日照不足、少雨で田植えが出来ないという干ばつなどが連続している。台風の際に山越えの南風がフェーン現象を招き、高温

と風によって穂が実らなくなる「白穂」も続いている。

大きな流れとしては、高温化は間違いない。米粒が白濁したり中心部にヒビが入ったりする「高温障害」は、当たり前の現象になってきた。

平野部より三百メートルほど標高が高い集落は、以前は「冷害の村」と呼ばれていた。三年に一度は、穂に実が入らない「青立ち」の状態になっていたという棚田群は、いまは一等米の優良な産地となっている。

地べたにはいつくばって生きている人たちは、気候変動を、生活実感として感じている。

「経済」で 破壊が進む

経済も面白い。地元農協のコメの買い上げ価格は、一俵六十キロあたり一万八千円。標準的な田んぼ一枚（一反＝十アール）の収量は、七俵から十俵。その十倍の一町

（一ヘクタール）の収穫量は多くて百俵。だいたい一軒の農家は一町の田んぼを持っている。

戦後の農地解放で各農家が受けた面積が一町だからだ。多くは高齢化し、また若い世代がいても勤めが忙しい家は、親戚や知人に耕作を委託している。なので、農業に熱心なお宅が、数ヘクタールで稲作をしている。

近所で四ヘクタールを耕作している農家でも、総収入は六百万円程度から多くて八百万円使っているトラクター（五百、六百万円）、田植え機（二百、三百万円）、刈り取り用のコンバイン（五百、六百万円）、その格納庫（数百万円）などで二千万円もの投資が必要だ。機器類の償却だけで二百万円前後、燃料、肥料、農薬、苗、機器の修理メンテナンスなどの経費を入れると、もはや人件費は二百万円あるかどうか。

これでは、若者の新規就農などというのは、絵空事で、子ども世代はみんな都市に出てゆく。

いまの「経済」は、確実に日本の農と、農に依存してきた地域を破壊している。

農家は激減し、山の斜面に広がる棚田は、効率が悪いかと放棄され、雑草雑木が繁り始めた棚田は大雨で崩れて土石流となつて、平野部の田んぼや住宅を襲う。

気候変動とグローバル経済が見事に絡み合つて、田舎の光景はどんどん変わつてゆく。

丸い田んぼ 四角に変化

こんなことに気がつくのも、田舎にべつたり暮らすようになったからだ。

自分でも、小さな三畝（三アール）の田んぼで、米作りを続けてきた。もう十三回の米作りになった。

全部手作業でやることで、小さな田んぼでも、場所によって土質が違い、深さが違うことが分かる。

先生役の隣のじいちゃんから、昔の米作りの話を聞く。国が主導して田んぼを四角にした「土地改良」の前の、地形に沿って曲線を描いた田んぼの姿が目につく。

浮かんて来る。じいちゃん達の中には、古文書の専門家がいます。その人たちの解説文を通して、江戸時代に

田んぼがどのように開発されてきたのかも、また見えてくる。「先祖伝来の田んぼ」などいつていって、四百年ほど前の太閤検地の時には、目の前の田んぼの三分の一ぐらいが存在していたに過ぎない。江戸時代に

大阪の商人が願ひ出て、扇状地の森だった場所を切り開く開拓をして水が回るようにして、私の住む塩沢地区の田んぼは二倍になったそう。さらに明治以降、山に向かつてどんどんと田んぼが作られた。昭和の土地改良で丸く連続していた田んぼが、四角いいまの姿になった。

大きな歴史の軸の中の、田んぼと人々の光景を、じいちゃんと一緒にあぜに座りながら見渡していると、人々の命と暮らしがどのように支えられてきたのか、よく分かる。

命支える根 田舎にあり

グローバル人材だの、プログラミング教育による新しい成長だの、まぶしい言葉がいつぱい飛び交う時代だが、命を自分で支えるという根っこが田舎にはある。

変動幅を大きくした気候。それが台風の規模を大きくし、数を増やす。設計強度以上の風で電柱が次々に倒れ、次には建物

や高圧線、鉄道構造物が壊れてもおかしくない。友人が自慢する「一応これでも億ションなんだけど」というタワーマンションが、風速六十mにさらされ、大規模停電が起き、水洗トイレが使えなくなり、コンクリート堤防の向こう側から川の水、海の水が、どつと市街地に入ってくる。

そんな時代に、「グローバル人材」は、どう役立ってくれるのだろう。

国土強靱化といって土建屋さんがいくら構造物を造つても、この巨大な風と水の循環に、どう太刀打ちできるのだろう。

わずか数十年の経験しかない、いまの「経済」が、どこまでこの日本と世界を支えて行くことができるのだろう。

エコプラス 未来へ試み

いったい、どういう未来を作るのか。

私たちは、再出発しないといけないのではないかな。子どもや若者たちだけが学ぶのではなく、大人も、高齢者も、まじめに考え直さないといいなのではないかな。

「持続可能な社会づくり」を大学で教える私の連れ合いが展開する、「特定非営利活動法人

交



種モミをまく大前純一さん

ECOPLUS」(エコプラス)は、そんな危機感を背景に、ささやかながらいくつかのプロジェクトを行っている。舞台は田舎だ。

私たちが住む南魚沼市の山あいの集落。そこの人々と一緒に暮らして、いくつもの田んぼを一緒に使わせてもらって、例えば「休日農業講座」田んぼのイロハ、なるものを続けている。

を使うのをやめて十数年になつた田んぼには、無数のタニシが渦巻き状の「足跡」を付け、背中に卵を背負ったコオイムシがうごめき、数ミリの小さな生きものから、オタマジャクシ、ヤゴがうごめいている。空には渡りをするタカ、一種サシバが舞い、ヘビやカエルを狙っている。ベトナム戦争で使われた枯草剤をもとに作られたのが除草剤。つまり毒だ。植物の成長を阻害する成分が含まれていて、多くは発がん性が指摘されている。一九六〇年代に導入された当初は、子どもは田んぼに近づくな大人も田んぼには必ず長靴で入

れ、と指導された。村人はいもうホタルもオタマジャクシもドジョウも、全部死に絶えたといわれる。その後、毒性が薄められたものが使われるようにはなつたが、長期の影響は分からない。米国で発がん性があると指摘され、訴訟で十億ドル(約千億円)単位の賠償命令が出たグリホサートは、欧米やアジア各国で使用が禁止され始めているが、日本では「ラウンドアップ」の名前でホームセンターでも堂々と売られている。田んぼでも田植え前の雑草退治に有効と宣伝されている。

農薬の有無
田んぼに差

根っこから吸い上げられた化学物質は、米粒に残り、人体に長期にわたって蓄積される。私たちは、化学物質の長期毒性テストの真つ最中なのだ。

大前純一さん 朝日新聞社で社会部記者として健筆を振るつた後、米国のマサチューセッツ工科大学(MIT)に留学し、帰国後、朝日のデジタル部門の実務的なトップとして同社の草創期のインターネットサービス開発を牽引した。あわせてその分野での日本全体の発展に

実際に、無農薬の田んぼとそうでない田んぼを、現場で見ると、まさに一目瞭然。みなさんも、近くで田んぼをぜひのぞいて欲しい。

生きものの豊かさがまったく違うのだ。稲株と土だけしかない、一見「きれいな」田んぼは、除草剤をお使いだ。無農薬、あるいは農薬を減らした田んぼは、地面には雑草が何種類にも層になり、その上にクモの巣があり、小さな生き物達が自在に動いている。こちらは「雑然」としているが、それがまさに自然なのだ。

日本では、都道府県ごとにどれくらい農薬を使うかの標準が定められている。一般的な栽培というところで「慣行栽培」とされ、おおむね農薬を二十回成分・回(一成分を一回まくと一成分・回)使う。種もみの段階から、濃厚な薬液に浸けて病気を

も寄与した。十八年前に、定年まで十三年を残して惜しまれながら退社し、デジタルと一見対極にある自然の世界に飛び込んだ。現在、新潟県南魚沼市に住み、奥様が主宰するNPO法人「持続可能な社会づくりを目指す「エコプラス」の事務局長を務めている。

や雑草を防ぐとされている。

「田舎民」と
「都会民」と

二十回も農薬をぐぐり抜けたコメを食べていた、など、私も田舎に来て、自分でコメを作つて初めて知ったことだ。

健康にいいという玄米。残留農薬は多くは米粒の外側に残るとされる。つまり玄米食をする人は、それだけ農薬吸収量が多い。玄米食をされるのなら、まず無農薬米、せめて減農薬米をお勧めする。

田植えや稲刈りをしながら、そんな農をめぐると話を、地元の方と都会のみなさんが交わす。これが互いの学びの出発点、だと思う。

田舎の方も、好き好んで農薬をされているのではない。「手で草取りをする」としたら田んぼ一枚一反に二人で三日かかる。それを収穫までに三回それだけで十八人日。

「とてもじゃないが時間がないし、人を雇えば十八万円にもなる。除草剤なら一袋四千円の薬を投げ込めば済む」

「もし、草取り費用も含む値段で買ってもらえるのなら、話は別」
というので、一キロあたりお米千五百円で買ってもらえる

のなら、可能性が出てくる。

お茶わん一杯分のお米は乾燥重量で六十グラム、一キロの二十十分の一強だ。なのでキロ五百円のお米は、お茶わん一杯にすると九十五円。ファミレスのご飯は百円前後。それを自宅が一番安心なお米にするというのはそんな大変な話ではない。そもそも、おかずにかけているお金を考えれば、お米は余りに低く評価されているのではないか。そんな話に発展していくのが、このプログラム。

都市では、田舎の話は別世界かもしれない。しかし、地震が起きようが台風が来ようが。山からの清冽な沢水と薪と、蓄えたコメさえあれば、田舎では半年やそこらは平気で生き延びることが出来る。自分の命を自分の手でつかんでいる実感がある。都市をさらに大きくするだけの一方で進んできた私たちの社会は、その価値観を根底から作り直す必要がある。そう感じている。

ご興味がある方は「エコプラス」を検索してウェブサイトを覗きください。今年の無農薬米も、数量限定ですがお分けできます。

(朝日旧友会会員の一人である森治郎さんが発行するウェブ雑誌「探見」から転載)

点

交

差

点

ノーマア戦争

南極大陸の約束

コスタリカ憲法

柴田さんの
熱いねがい

国境なし 軍事基地なし 共有の財産

「ジャーナリズムの使命は権力の監視にある」という言葉がある。権力だけでなく、社会のあらゆることをチェックするのがメディアの役割だが、権力の監視のなかでも最も大切なのが「戦争を起こさせない」ことだ。権力者のなかには、ときに戦争を起こしたがる人がいるからだ。

ジャーナリズムの役割は、平和を守ることだと言い換えてもいいが、平和には二種類ある。誰もが武器を持たず、争いを武力で解決しようとはしない「真の平和」と軍事力のバランスで保たれる「仮の平和」である。

戦後日本は、戦争を放棄した憲法九条のもと、「真の平和」を目指してスタートしたが、米ソ対立の激化でその後は自衛隊と米国の核の傘という「仮の平和」の中にある。しかし、自衛隊の軍備は、日本が武力攻撃を受けたときだけ戦うというもので、海外の戦争には一切かかわらないという点では、半分は「真の平和」を捨ててはいなかった。

ところが、安倍政権になって、「日本を取り巻く安全保障環境の変化」を理由に「真の平和」の部分は捨て、「仮の平和」一本に絞ろうという方向に動き出した。戦後一貫して憲法違反だとしてきた集団的自衛権の行使を閣議決

非武装中立 軍隊なし 軍備費は教育に

定で解釈を変え、米国の戦争にも参戦する道を開くと同時に、米国の軍勢力（抑止力）による「仮の平和」を保とうとする方向へ舵を切ったのである。それでいいのだろうか。軍勢力（抑止力）のバランスを保つ「仮の平和」というのは、どうしても軍勢力の強化という軍拡競争に走り出す危険が伴う。北朝鮮が国民の飢えも放置して核兵器やミサイルの開発に全力をあげているのも、「抑止力」のためだと主張しており、それに対抗して韓国も日本も「核兵器を」と言い出したら、世界はどうなるのか。

抑止力による「仮の平和」は、パワーバランスが崩れたり、あるいは、暴走する国が現れたりすれば、平和は崩れ、核戦争が起こってしまうのだ。

したがって、戦争をなくすには、「仮の平和」ではなく、「真の平和」を目指す必要がある。これは、いうまでもなからう。

いま、この地球上に「仮の平和」ではなく、「真の平和」を実現している場所が二つある。南極大陸と中米の小国、コスタリカである。

南極大陸は、日本の約四十倍もある世界でも五番目に大きな大陸だが、一九五九年に制定され、六一年に発効した南極条約によって、「国境もなけ

れば、軍事基地もない」人類の共有財産ともいうべき「平和の地」になっている。私が子どものころからの夢だった科学者への道をあきらめ、ジャーナリストになったのは、二度と戦争はご免だ」という私のもう一つの夢を実現するために、新たな道を選んだ結果だった。そして、科学者として参加する予定だった南極観測に、新聞記者になっても参加できたのだから、何とも幸せなことだった。

私が同行記者として参加したのは、一九六五～六六年の第七次観測隊だったが、国際地球観測年（IGY一九五七～五八）が終わって、米国の提案で五九年に南極条約が制定され、六一年に発効した直後のことである。IGYでのソ連の大活躍に恐れをなし、「ソ連が南極に軍事基地を設けたら大変だ」との思いが提案の動機だったが、一方、ソ連のほうも同じ思いがあり、いわば米ソの相互不信が生んだ条約だった。しかし、出来上がったものは、人類の理想を実現した「理想の条約」だったのだ。

第一条に軍事利用の禁止を、二条、三条で科学観測の自由

をうたい、第四条で領土権を凍結し、第五条で核実験や核廃棄物の処理の禁止を定めている。まだ原発が動き出してから間もない時期だったというのに、これを定めた先見の明はすごいものだ。もし南極条約がなかったら南極は世界中の「核のゴミ捨て場」になっていたかもしれないのだ。

私は七次隊の帰途、昭和基地の東隣りにあるソ連のマラジョウジナヤ基地を訪ねたとき、当時はまだ東西対決の厳しい時代だったのに、心温まる大歓迎を受けて南極条約の素晴らしさを実感した。

その三年後、日本の極点旅行隊を南極点で迎えるため、米軍隊に頼んで南極点にある米国の「アムンゼン・スコット基地」を訪ねたときも、日本の旅行隊員にベットの提供し、自らは長椅子に寝るといふほど米軍隊の歓迎ぶりもすごかったし、四十年後の第四七次観測隊に同行取材したときは、ドイツ隊との共同観測の進め方に心がときめいた。

こうした南極観測の実体験から私の得たものは、「世界中を南極にすれば、戦争はなくなるぞ」という確信だった。南極大陸のように国境もない地球をひとつの国家にすれば、軍隊は要らなくなり、戦争もなくなるか

らである。

そこで私は、四七次隊の帰国後、南極の語り部となり、「世界中を南極にしよう」と講演をして歩くことを仕事としように心に決めた。

しかし、私ひとりでは、語り部の力も知れている。それに、国家をなくそうという考え方が、そもそも時代ばなれをしている。たとえば、外国旅行をするのに必要なパスポートは、国家が出てくれるもので、これがないと海外にも行けない。つまり、世界中を南極にするには、私の世代ではとても無理で、次の世代のやることだろう。そこで、次の世代にそのことを伝えるにはどうすればよいのか。すぐに思い浮かんだことは、中高生を南極に送り出すことだった。

しかし、日本の夏休みは南極では昼のない極夜で、オーストラリア、ニュージーランド、アルゼンチン、チリなどの南半球の国々とは違って、夏休みの活用ができない。

そこで私が考えたのは、小・中・高校の教員を南極派遣することだった。国立極地研究所の所長で、七十歳の私を南極に行くことを認めてくれた渡辺興重所長をはじめ、次の藤井理行所長、さらに次の所長、白石和行氏（第四七次観測隊長として私

「真の平和」実現を日指そう

を連れて行ってくれた人 みんな賛成してくれた。

そのうえ、運よく第五次隊から観測船が四代目の「新しらせ」に代わり、同行人員が急増できることもあって、毎年二人の教員派遣も決して無理ではないことも分かった。

日本には小・中・高校の教員は、ざっと百万人もいる。毎年二人ずつは微々たるもののように思われがちだが、そうではない。すでに十年経ったから、二十人、五十年経てば百人…。その教員たちが自校だけでなく隣

近所の学校にまで出かけて、南極の話をするようになれば、その影響力は極めて大きいものになる。

そのうえ派遣教員のネットワークを創り、教員同士互いに情報交換をして活動を続けられれば、その効果は計り知れない。

もう一つ「平和の地」コストリ力については二〇一八年、「コストリ力の奇跡」という映画と講演の会が東京であり、私はそれに出席して初めて知ったのだった。

コストリ力の憲法は、日本国

憲法よりやや遅れて一九四九年、フィゲレス大統領の英断で「非武装」をうたった。

日本の憲法九条は、その後の朝鮮戦争や米ソ対決から自衛隊を創設し、「仮の平和」に舵を切ったことは前述の通りだが、コストリ力は非武装を守り、軍備費をすべて教育費に回して、「軍隊なし」を守ったのだからすごい。

コストリ力はそれまで平和国家だったわけではなく、内戦も絶えない国だったのだが、憲法ができてからは非武装を守り通

し、紛争は国際機関に訴えて解決するという方式を堅持している。一九八七年には当時のアリス大統領がノーベル平和賞を受賞。二〇一七年の国連総会では「核兵器禁止条約」を提案、議長国を務め、百二十二カ国の賛同を得て採択され、現在、発効に向けて各国の批准が続けられている。唯一の被爆国、日本の安倍政権は、米国に同調して反対しているが……。

私は、コストリ力のことを知ってから、南極方式がいいのか、コストリ力方式がいいのか、考えあぐねている。戦争さえなくせれば、どちらの方式でもいいのだが、要は、どちらの方式が実現しやすいか、だ。

世界中を一つの国家にして、各国の大統領を「知事」のように扱えば一気に進むのではないかとも思ったが、コストリ力のような国が、少しずつでも増えていく方が案外、早いかもしれない。どちらでもいい。核戦争が起こる前に間に合えば……。

知的好奇心 終わりのない「旅路」

《メモ》論客である柴田鉄治さんは、体験派でもあり、知的好奇心の塊である。若いころと七十歳になってからと三度、南極を訪れています。その飽くなき知的好奇心には脱帽するばかりです。そして今、体調は万全ではありません。それにもかかわらず、探究心を持ち続けておられる。さまざまな活動に、積極的にかかわる。柴田さんの「旅路」には終わりがありません。

とを思い起こさせます。烈公は、教育に力を入れ、幕末に藩校「弘道館」を設立します。名越時正著の小冊子「水戸藩弘道館とその教育」によると、斉昭の記文に示された建学の精神は、要約次のようなものだった。

一、道を弘める者は人である。故に人は道を学びこれを弘める使命をもたねばならぬ。

二、日本の道は神皇の道である。御歴代天皇も国民も、この道を守って一貫して来られた。そして、歴史に盛衰はあっても断絶の無いのは、非常の時に非

常の人物が出て、この道を死守したからである。故に国民はこの恩に感謝し、恩に報いねばならない。

三、この恩に報いるためには、日本の道を奉ずるとともに、外国の良き教へは取り、忠孝二無く、文武岐れず、学問事業其の效を殊にせず、敬神崇儒偏黨あるなく、衆思を集め群力を宣へなければならぬ。それには日夜怠らず努力することが必要である。

弘道館は、入学年齢は十五歳で、決して早くはなかった。

十五歳までは私塾に通って素読を学んだ後、私塾の教師が保証人になって、弘道館に入学の手続きをし、許可されると晴れて入学となる。入学式は厳粛に行われ、学校奉行の訓示の後、総長から入学規則が授与され、舎長が引率して鹿島神社や孔子廟を参拝したという。

しかし、卒業式は行われなかった。名越の冊子によると、その理由について、斉昭は自ら次のように述べている。

市民のついで

昨年暮れの会報二三五号で、工務局出身の久保田敏さんのがん闘病記を紹介させて

久保田さん講演

もらいました。久保田さんは、高校時代の体験や、労働組合の専従役員を務めたとき知り合った

た先輩の言葉、新聞報道から得たもの、などを文章に綴ることで力をもらい、がん向き合ったということでした。その久保田さんが、今年七月、埼玉県所沢市の保健センターで開かれた「在宅医療をこぞ知るか」のまちで最期まで自分らしく暮らしたいがテーマのついでで、講演されたそうです。演題は「がんの告知から治療を乗り越えて」というものでした。久保田さんのご活躍に乾杯です。

久保田さんは、講演の中で、多くの人に支えられた自分があることも話されました。その要旨は次のようなものだったということです。

四つの信条を軸にした「がん」を患って考えたこと、の文章が、朝日旧友会の会報に掲載されたことで、思いもよらなかった多くの友人から、メールや電話が寄せられた。六割は後輩から、四割は同僚や先輩の友人たちでした。同僚・先輩は全体をとらえて「よくまとめたな」という評価を中心に自分の体験談（家族の病気も含む）。あるいは「人生本来無一物の」の文を読んで、気が楽になったという友人。現役に近い友人や、まだ働いている友人などは、「二番目、三番目の言葉に励まされた」という共感のメールが多かった、という傾向でした。

交

差

点